

まざあ・ぐうす

北原白秋訳

青空文庫

日本の子供たちに

はしがき

お母さんがちようのマザア・グウスはきれいな青い空の上に住んでいて、大きな美しいがちようの背中にのってその空を翔^かけつたり、月の世界の人たちのつい近くをひようひようと雪のようにあかるくとんでいるのだそうです。マザア・グウスのおばあさんがそのがちようの白い羽根をむしると、その羽根がやはり雪のようにはひらひらと、地の上に舞^もうてきて、おちる、すぐにその一つ一つが白い紙になって、その紙には子供たちのなによりよろこぶ

子供のお唄が書いてあるので、イギリスの子供たちのお母さんがたはこれの子供たちにいつも読んできかしてくだすつたのだそうです。いまでもそうだろうと思います。それでそのお話をお母さんからうかがったり、そのお唄を夢のようにうたっていたりするイギリスの子供たちは、どんなにあの金の卵きんをうむがちやうや、マザア・グウスのおばあさんをしたわしく思うかわかりません。

ですが、ほんとうをいえば、そのマザア・グウスはやはりわたくしたちと同じこの世界に住んでいた人でした。べつにお月さまのお隣の空にいた人ではありません。子供がすきな、そうして、ちやうどあのがちやうが金きんの卵でもうむように、ぼつとりぼつと

りとこの御本の中にあるような美しい子供のお唄を子供たちの間におとしてゆかれたのでした。ありがたいお母さんがちようではありませんか。

そのグウスというおばあさんはいまから二百年ばかり前に、その当時英国の植民地であった北アメリカにうまれたかたでした。そのおばあさんに一人のちつちやなまご息子むすこがありました。おばあさんはそのまご息子がかわゆくてならなかつたものですから、その子をよろこばせるためにその子のよろこぶような、そうしてその子の罪のない美しいお夢をまだまだかわいいきれいな深みのあるものにしてやりたいのでした。それでいろいろなおもしろいお唄をしぜんと自分でつくりだすようになりました。やっぱりそ

の子がかわいかったのですね。

それも初めはただなんということなしに節をつけておはなししたり、うたったりしたものでしょうが、そうしたものはどうしても忘れやすいものですから、また覚え書きに書きとめておくようになりしました。そうなるもまた、そうして書きとめておいたのが一つふえ二つふえしていつかしら一冊の御本にまとまるようになったのでしよう。

そのおばあさんの養子にトオマス・フリイトという人がありました。この人は印刷屋さんでした。で、そのお母さんが自分の息子のためにうたってくださいった、そうしたありがたいお唄を刷すつて、自分の息子ばかりでなく、ほかのたくさんの子供たちをよろ

こぼしてやりたいと思ったのでした。それでこのマザア・グウスの童謡の御本がはじめて刷られて、ひろく世間によまれるようになりました。それは西洋暦の千七百十九年という年で、時のイギリスの王さまはジョウジ一世ともうされるおかたでした。

で、このマザア・グウスの童謡はずいぶんと古いものです。古いものですけれど、いつまでたっても新しい。ほんとにいいものはいつまでたっても昔のままに新しいものです。考えてみてもその御本がでてから、イギリスの子供たちはどんなにしあわせになったかわかりません。その子供たちがおとなになり、またつぎからつぎにかわいい子供たちがうまれてきて、またつぎからつぎにこのお母さんがちょうのねんねこ唄をうたって大きくなってゆく

のです。それにこの御本がでてからしあわせにされたのはそのイギリスの子供ばかりではありません。イギリスのことばをつかっている国々の子供はむろんのことですが、世界じゅうのいろいろな国のことばに訳されていますので、そうした国々の子供たちもみんなしあわせにされているはずで、それにいろいろ作曲されて、ずいぶんひろくうたわれているようです。ですから、赤いちばしと赤い水かきとをもったがちようのおばあさんがおいすに腰かけて、おなじような赤いちっちゃなくちばしと赤いちっちゃな水かきとをもったちっちゃながちようをおひぎにのつけて、赤い御本をひらいている画えのついた表紙のや、三角帽さんかくぼうのリボンに鷺がペンをさしたおばあさんがテエブルの前に腰をかけて、なにか

書いていると、そのそばから大きながちょうがくちばしをあけて、針の頭のように眼めをちっちゃくしてのぞきこんでいる画のや、がちょうとおばあさんが空を翔かけているのや、
緑みどりいろ色の牧草まきぐさの中に金の卵をおとしている白いめんどりのがちょうのや、いろいろな本がでています。

日本ではこのわたしのが初めてです。日本の子供たちのために、わたしはこのお母さんががちょうを日本の空の上にきてもらいました。そうして空からひらひらとその唄のついたがちょうの羽根をちらしてもらったのでした。その羽根にかいてある字はイギリスの字ですから、わたしは桃色のお月さまの光でひとつひとつずつかしてみても、それを日本のことばになおして、あなたがた、日本の

かわいい子供たちにうたつてあげるのです。そしてみんなうたえるようにうたいながら書きなおしたのですからみんなうたえます。うたつてごらんさい。ずいぶんおもしろいから。

その童謡の中には、青いもえぎいろ萌黄色の月の夜よのお月さまをとびこえるめうしのダンスや、紅い胸あかのこまどりが死んで白嘴しらはしがらすがお経をよむのや、王さまの前のパイのお皿からうたいだす二十四匹の黒つぐみや、「パンにおせんべい」とうなるロンドンのお寺の鐘や、おうちが大火事でプツジングのおなべの下にもぐりこむてんとうむしのむすめや、赤いにしんにのまれるくろんぼうの子供や、かごにのつて青あおてんじょう天井のすすはきしにお月さまより高たかくのぼるおばあさん、おくつの中に子供をどっさりいれてしまつ

にこまるおばあさん、ひきわりむぎ挽割麦をさんぎん三斤ぬすんでお菓子をこさえる王さまや、おやゆび拇指よりもちいさな豆つぶのだんなさま、赤いおわんにのって海へでるおりこうさん、気ちがいうまにのってめちやくちやにかけてゆく気ちがいの親子、そうした、それはもうどんなに不思議で美しくて、おかしくて、ばかばかしくて、おもしろくて、なさけなくて、おこりたくて、わらいたくて、うたいたくなるか、ほんとにゆつくりとよんで、そうしてあなたがたも今までよりもずっとかわったお月夜の空や朝焼け夕焼けの色どりを心にとめて、いつも美しいあなたがたのお夢を深めてくださるよう。そうならわたしはどんなにうれしいかわかりません。

この本の中の童謡はおもにそのマザア・グウスから訳したので

すが、そのほかにもイギリスやアメリカの子供のうたっているの
で違ったのがたくさんつけたしてあります。いろんな指あそびや、
顔あそび、めくら鬼、はしご段あそびなど、日本のとちがった遊
戯唄をおしまいのほうにのせてみました。皆さんでひとつやっ
てくださるとうれしいと思います。

これからもまだいろんなものを皆さんのために書いてお贈りし
たいと思いますが、わたしもこれからほんとに念をいれて、
がちようが金の卵をうみ落とすように、ほんとにいい童謡をほつ
りほつりと落としてゆきたいと思います。

では、どうぞ、この本の初めにあるその金の卵の歌からよんで
いってください。するときつとがちようがあなたがたを背中の中の

せて、高い高いお月さまのそばまで翔かけてゆくでしょう。

大正十年九月

木みみずく兔うさぎの家にて

白秋しるす

序詩

マザア・グウスの歌

マザア・グウスのおばあさん、
いつもであるくそのときは、
きれいながちようの背にのつて、
空をひようひよう翔^かけてゆく。

マザア・グウスのすむ家^{いえ}は、
一つ、ちんまり、森の中、
戸口にや一羽の梟^{ごろすけ}が

みはりするのでたっている。

むすこがひとりで名はジャック、

その子まらずまずお人よし、

ずんとよいことせぬ代わり、

ずるいわるさもようしえぬ。

市場いちばへジャックをやったれば、

めすのがちようを買ってくる、

「まあまあ、お母さん、みておいで、

そのうちいいこともあるでしよよ」

それからがちょうのめすとおす
なかよしこよしであそんでる。
いつもいっしよに餌えをたべて、
ガアガア、お池におよいでる。

ある朝、ジャックがいつてみりや、

(ほんに話によくきいた)

金の卵があります。

うんでくれたはめすがちょう。

金の卵だ、はよ告げよ、

ジャックはお母さんへとんでゆく。

お母さんもほくほくごきげんだ。

「それはよかった、おおできじや」

ジャックは卵をうりにでる。

それをかおうと猶ジユウ太人の悪者わる、

おもう半値もつけないで、

うまうまジャックをちよろまかす。

ジャックはお嫁とりにゆきます。

むこうのおじようさんは華美好きで、

それはかわいい、うつくしい、

花の山査子さんざし、百合ゆりみたよう。

ところへ、あとからつけまわす

猶太人ジユウとおしやれのおべつか屋、

脇腹わきばらめがけて、ぶってやると、

かわいいそなジャックにつつかかる。

そのときすばやく、すつときたは、

マザア・グウスのおばあさん、

杖でジャックをちよいと打ちや、
つえ

道化の*ハアレクインにはやがわり。

つづいて、おばあさんが杖あげて、

きれいなおじょうさんをちよいと打ちや、

すぐにその子もはやがわり、

それこそかわいい**コランバイン。

金の卵は海の中、

どさくさまぎれにほうられる。

だけど、ジャックがとびこんで、

またももとへととりかえず。

それで、めすがちようとつた猶^{ジユウ}太人のやつ、
ころしちまえといきまいた、
割^さいて、こいつを売つとばしや、
ポケツトにたんまり金もうけ。

ジャックのお母さんは、それみると、
すぐがちようをひつたくり、
そして、その背にうちのつて、
お月さまめがけてとんでいった。

* *
* *
コランバイン。これは女役です。
* *
ハアレクイン。道化芝居しばいの男役です。

まざあ・ぐうす

こまどりのお葬式ともらい

「だアれがころした、こまどりのおすを」

「そオれはわたしよ」すずめがこういった。

「わたしの弓で、わたしの矢羽やばで、

わたしがころした、こまどりのおすを」

「だアれがみつけた、しんだのをみつけた」

「そオれはわたしよ」あおばえがそういった。

「わたしの眼々めめで、ちいさな眼々で、

わたしがみつけた、その死骸しがいみつけた」

「だあれがとつたぞ、その血をとつたぞ」

「そおれはわたしよ」さかな魚ながそういった。

「わたしの皿に、ちいさな皿に、

わたしがとつたよ、その血をとつたよ」

「だあれがつくる、きょうかたびら経帷子きょうかたびらをつくる」

「そおれはわたしよ」かぶとむしがそういった。

「わたしの糸で、わたしの針で、

わたしがつくる、経帷子をつくる」

「だアれがしるす、かいみょう戒名をしるす」

「そオれはわたしよ」ひばりがそういった。

「あかるいならば、くれないならば、

わたしがしるそ、戒名をしるそ」

「だアれがたつか、お葬式ともらいにたつか」

「そオれはわたしよ」おはとがそういった。

「葬ともらってやるよ、かわいそなものを、

わたしがたとうよ、お葬式にたとうよ」

「だあれがほるか、お墓の穴を」

「そおれはわたしよ」ふくろがそういった。

「わたしのこて鍔で、ちいさな鍔で、

わたしがほろよ、お墓の穴を」

「だあれがなるぞ、お坊さんぼうになるぞ」

「そおれはわたしよ」白しら嘴はしがらすがそういった。

「きようほん経きん本ほんもつて、小本こほんをもつて、

わたしがなるぞ、お坊さんになるぞ」

「だあれがならず、お鐘をならず」

「そおれはわたしよ」おうしがこういった。

「わたしはひける、力がござる、

わたしがならそ、お鐘をならそ」

^{そおら}空の上からみんなの小鳥が、

ためいきついたりすすりなきしたり、

みんなみんなきいた、なりだす鐘を、

かわいそなこまどりのお葬^{ともらい}式の鐘を。

お月夜

へつこら、ひよつこら、へつこらしよ。

ねこが胡こぎゆう弓ひいた、

めうしがお月さまとびこえた、

こいぬがそれみてわらいだす、

お皿がおさじをおっかけた。

へつこら、ひよつこら、へつこらしよ。

天竺てんじくねずみのちびすけ

天竺てんじくねずみのちびすけは、

ちびだからふとつちやいなかった。

いつもあんよでおあるきで、

たべるときや断食だんじきやいたさない。

さてそこらからかけてでりや、

けっしてそこにはもういない。

きけば、かけてるそのときは、

どっちみちじつとしちやいないそだ。

キイキイなくのは常々ふんだんだ、めちやくちやあばれもたままだ。それがさわいでわめくときや、けっしてだまっちやいなかった。たとえねこからおそわらなくとも、

はつかねずみがただのねずみでないのは御承知だ。

ところでたしかなうわさだが、

ある日、ひよつくり気がふれて、奇態な死に方した話。

とても勘かんのいい、金棒かなぼうひ引きの人たちは、

きやつめおっ死ちんだで、いきてるわけないぞといっている。

木のぼりのおさる

木のぼりのおさるさん、

おちたときや、そのときやおちていた。

石いしの上うへのつんがらす、

飛たつたときや、そこらにや影かげもない。

りんごかじりの婆ばばおかみ、

二つたべたときや、一対たべていた。

水車場すいしゃばがよいの小荷駄こにだうま、

てくるときや、じつとたつちやいなかった。

拇指おやゆびちよんぎつたうしころし、

けがしたそのときや、血をだした。

かけっこしてゆくお供オともさん、

はやがけするときや、かけあしだ。

おくつそそくるくつなおし、

つくろつちやったそのときや、しあげてた。

ろうそくつくるがろうそく屋、

型からひっぱいだときや、手にもつてた。

スペインさしていった艦隊^{かあんたい}、

かえったときや、またぞろやってきてた。

くるみ

ちいさな緑のお家うちがひとつ。

ちいさな緑のお家の中に、

ちいさな金茶のお家がひとつ。

ちいさな金茶のお家の中に、

ちいさな黄色いお家がひとつ。

ちいさな黄色いお家の中に、

ちいさな白しろいお家がひとつ。

ちいさな白しろいお家の中に、

ち
い
さ
な^ハ
心^ア
が^ト
た
だ
ひ
い
と
つ。

ボンベイのふとつちよ

ひとりふとつちよがボンベイにござった。

ある日、日なたでたばこのんでござった。

そこへ、ついときたはしぎという小鳥よ、

パイプひつさらってまたふいととんじまう。

そこでじれました、ボンベイのふとつちよ。

六ペンスの歌

うたえうたえ、六ペンスの歌を。

かくし衣囊にやごほうびの麦がある。

にしゅうしひき二十四匹の黒つぐみ、

ほう焙じこまれて、パイの中。

パイがはがれたそのときに、

すぐに小鳥がうたいだす。

もともと王さまにそなえます

きれいなお皿じゃ、そりやないか。

『王さまは会計院で、
お金の御勘定かんじょう。』

おきさきやお居間で、
パンと蜜みつをめしあがり。

女中さんはお庭で、
衣裳いしやうをせつせとほしている。

そこへ小鳥が一羽とんでまいって、

つんとはじきました、女中さんのお鼻』

一時

いっちく、たっちく、おうやおや。

ねずみが時計をかけあがる。

柱時計がチーンとうつ。

ねずみがすたこらかけおる。

いっちく、たっちく、おうやおや。

卵

お乳のよに白い大理石の壁に、
絹きぬの柔軟しなしたうすい膜かわつけて、
すいて凝こった泉の中に

金のりんごがみえます。

そのお城に戸一つないので、

どろぼうどもまでわりこんで金のりんごをぬすみだす。

朝焼け夕焼け

朝焼け小焼け、

ひつじかいの気がかり。

夕焼け小焼け、

ひつじかいのごし後しょうらく生らく楽。

風がふきや

風がふきや、

まわります、

粉ひき車よ。

風がやみや、

とまります、

粉ひき車さ。

文なし

一文なしの文三郎もんさぶろう、文三郎をさらおうと

どろぼうどもがやつてきた。

にげた、にげた、烟突えんとつの素頂辺すてっぺんへ攀よじてつた。

しめた、しめたとどろぼうどもがおっかけた。

それをみて文三郎、そろつとむこうへにげおりた。

こうなりやみつかるまい。

かけた、かけた、十五日じゅうごんちに十四じゅうしマイル、

それで、ふりむいたが、もうだアれもみえなんだ。

ファウスト 国^{せんせい}手

ファウスト 国^{せんせい}手はいい人で、

時々、お弟子たちをひっぱたく。

ひっぱたいて、おどらして、追ったてて、

イギリスでてからフランスへ、

フランスでてからスペインへ、

そしてまた、ひっぱたいて逆もどり。

とことこ床屋さん

とこ、とこ、床屋さん、

ぶたの毛かっちよくれ、

^{かづら}鬘がちよつくらいりようだが、

何本、その毛がありやたりる。

^{にじゅうし}二十四本でたくさんだ。

フンとお鼻でごあいさつ。

おくつの中に

おくつの中におばあさんがござる、

子供がどっさり、しまつがつかない、

おかゆばかり、パンもなにもやらず、

おまけに、こつびどくひっぱたき、

ねろちゆば、ねろちゆば、このちびら。

一つの石に

一つの石に小鳥が二羽よ。

ファ、ラ、ラ、ラ、ラルド。

一羽がとんでった、一羽がのこった。

ファ、ラ、ラ、ラ、ラルド。

また一羽とんでった、だあれもなくなつた。

ファ、ラ、ラ、ラ、ラルド。

石だけぽつつりのオこった。たつたひとりのオこった。

ファ、ラ、ラ、ラ、ラルド。

コオル老王

お年寄りのコオル王は愉快なお爺じっさ、

愉快なお爺じっさ、

すぐにパイプめして、お酒さかづき杯めしてね、

そして胡こきゆう弓ひきを三人ほどおめしで。

どれの胡弓ひきもよい胡弓もちでよ、

中で一番なは王さまの胡弓よ、

ツウイ・ツウイズル・デイ、ツウイズル・デイ。
……

それそれ胡弓ひきがひきだしたよ、おききな。
だれにくらびようか、めったにまたなかる、
コオル王さまとその胡弓ひきよね。

雨、雨、いつちまえ

雨、雨、いつちまえ、

またいつかきなよ、

はよでてあアそぼに。

花壇にぶた

お庭の花壇にぶたがでた。

それいってとっつかめ。

小麦の畑はたけにうしがきた。

はしれ、はしれ、男の子。

クリイムのおなべにねこがいる。

はしれ、はしれ、女の子。

山火事だ。

は
し
れ、
は
し
れ、
男
の
子。

日の照り雨

日の照り^{あアめ}雨、
^{こはんとぎ}小半時ももてぬ。

いばらのかげに

いばらのかげに、

ひもじさ、さむさ。

花さくかげに、

しろがね、こがね。
白金、黄金。

セント・クレメンツの鐘

のぼれいそいそ、またおりなされ、
鐘はロンドン、つけば数ござる。

「オレンジにレモン」

セント・クレメンツの鐘がなる。

「まと標的と、まと標的の星」

セント・マアガレッツの鐘がなる。

「煉瓦れんがに瓦かわら」

セント・ギルスの鐘になる。

「ハアフ半ペンスに*ファシング」

セント・マアルチンスの鐘になる。

「パン菓子におせんべい」

セント・ピイタアスの鐘になる。

「二本の枝、一つのりんご」

ホワイト・チャペルの鐘がなる。

「灰かき、火ばし」

セント・ジョンスの鐘がなる。

「湯わかし、おなべ」

セント・アンヌスの鐘がなる。

「バルドペエトじいさんよう」

オルトゲエドののろい鐘。

「おまえに十シルリング貸しがある」
セント・ヘレンズの鐘になる。

「いいつはろうてくれるんじや」
ふるいベエレエの鐘になる。

「おいらが金持ちになつたらな」
シヨルジツチの鐘になる。

「そしたらたのむよ、そのときは」
ステプニイの鐘になる。

「おれんしつたこつかい」と
ボウの大きな鐘の声。

さあきた、
手てしよく燭とこがお床へおまえをてらしにきた。

さあきた、首切り役人がおまえのそつ首ちよんぎりに。

* ファッシングは一ペンニイの四分の一。

おうまのり

レデイのうまのりや、

ツリイ、ツレ、ツレエ、

ツリイ、ツレ、ツレエ。

レデイのうまのりやこんなもんよ、はい。

ツリイ、ツレ、ツレエ。ツリ、ツレ、ツレエ。

ゼンツルマンのうまのりや、

ガロツプ・エ・ツロツト。

ガロツプ・エ・ツロツト。

ゼンツルマンのうまのりやこんなもんだ、ほい。

ガロツプ・エ・ツロツト、ガロツプ・エ・ツロツト。

おひやくししょうのうまのりや、

ホツブルデイ・ホイ、

ホツブルデイ・ホイ。

おひやくししょうどのうまのりやこんなもんじゃ、はあ。

ホツブルデイ・ホイ、ホツブルデイ・ホイ。

小徑^{こみち}にむすめ

小徑^{こみち}のほとりにひとりのむすめが、

なんだかいつてるけど、はつきりやいえないで、

ぐつつ、ぐつつ、ぐつつぐつつ。

むこうの小岡にひとりの男が、

たってはいれども、じつとしちやいられず、

ひよっこり、ひよっこり、ひよっこりしよ。

月の中の人

月の中の人が、

ころがつておちて、

北へゆく道で、

南へいつて、

凝こごえたえんどうじる豌豆汁で、

お舌をやいてこオがした。

十人のくろんぼの子供

十人よ、くろんぼの子供が十人よ。

おひるによばれてゆきました。

ひとりがのだくびつまらした。

そこで、九人くんにんになりました。

九人くんにんよ、くろんぼの子供が九人くんにんよ。

どの子もどの子もあさねぼうで、

ひとりがとうとうねすごした。

そこで、八人になりました。

八人よ、くろんぼの子供が八人よ。

いっしよに*デボンを旅してて、

ひとりがとちゆうでとどまった。

そこで、七しちにん人になりました。

七人よ、くろんぼの子供が七人よ。

木ぎれきりにとみないって、

ひとりがまふたつに腹きつた。

そこで、六人になりました。

六人よ、くろんぼの子供が六人よ。

はちの巢いじつて、かまつてて、

ひとりがくまんばちにさアされた。

そこで、五人になりました。

五人ごおにんよ、くろんぼの子供が五人ごおにんよ。

けんかしてお訴訟をおオこした、

ひとりが裁判所へゆきました。

そこで、四人になりました。

四人よ、くろんぼの子供が四人よ。
よオにん よオにん

みんなで海へとでかけたら、

赤いにしんにひとりがおまれた。

そこで、三人さんにんになりました。

三人よ、くろんぼの子供が三人よ。

こんどは動物園へいったれば、

くまめがひとりをひん抱だいた。

そこで、ふたりになりました。

ふうたりよ、くろんぼの子供がふうたりよ。

かんかん日だまりイすわりこみ、

ひとりがちぢれてやけしんだ。

そこで、ひとりになりました。

ひひとりよ、くろんぼの子供がひひとりよ。

いよいよ、たったひひとりよ、

その子がお嫁とりにでていった。

そこで、だアレもなくなつた。

* デボンはイギリスの西南部の一県で、デボンシルのことです。

お月さまの中のおひとが

お月さまの中のおひとが、

お月さまの外をながめて、

そして、こうおっしゃるわ。

いま、いま、わたしはおきかかる。

ねんね赤子のみんなはいまお寝よる。

クリスマスがきますわい

右や左や、クリスマス。

がちようがふとつてめえりやす。

どうぞや一ペン^{いち}ニイ、

じいめが帽子にほうりこんでください。

一ペンニイがおいやなら半ペンニイでもようござる。

半ペンニイでもないならば、

ごきげんよろしゅう、だんなさま。

べああ、べああ、ブラック・シイプ

べああ、べああ、ブラック・シイプ

おまえはいい毛をおもちだろ。

はい、はい、ふくろに三みふくろござります。

だんなさまに一ひとふくろ、

おくさまに一ふくろ、

だつけど、そこらの細道で、

べそかくぼつちやんにや、いやいや。

ろうそく

ちびこ、

なまえはナンシイ・エツチコウト、

白いペツチコウトに

赤い鼻もって、

ながくたってるほど、

みじかくなってしまう。

ちつちやなテイ・ウイ

ちつちやなテイ・ウイは海へゆき、

たななしボオトにのりこんで、

ゆらゆらゆられているうちに、

ちつちやなボオトがひつくりかえり、

これでお話もおおしまい。

三月、風よ

三月、風よ。

四月は雨よ。

五月は花の花ざかり。

お面もち

グレゴリイ・グリツグスさんは、

グレゴリイ・グリツグスさんは、

二十と七つのお面めんもちでおじやって、

とつかえ、ひつかえ、ひつかえ、とつかえ、

街まちじゆうをやんやとわらわせる。

東へいっちやひつかぶり、

西へいっちやひつかぶり、

それでも、どの面がいちばんおすきか、

やっぱり御本人でおいしいやれぬ。

ししと いっかくじゆう
一 角獣

ししと いっかくじゆう
一 角獣と

ふたりで王位をせりあつた。

ししがつよかつたで、

街を上うえした下おおあばれ、

そこで、白パンやったり、

黒パンやったり、

プラム 乾葡萄入ケイキやったり、

やつとこすつとこおいだした。

くつやさん

くつやさん、おうち。

はい、はい、こんにちは。

おくつをつくろいたのみます。

よしきた。合点^{がてん}だ。

こちらに一釘^{ひとつくぎ}、そちらに一釘、

とんとんとんとん。

きれいなくびまき

ジイニイ、むすびにきとくれよ。

ジイニイ、むすびにきとくれよ。

ジイニイ、むすびにきとくれよ。

わたしのきれいなくびまきを。

わたしはうしろでむすんでよ。

わたしは前まアえでむすんでよ。

わたしは何度もむすんでよ。

もうもうわたしはかまやせぬ。

何人何びき何ぶくろ

セント・イブへとわしがおまいりするとき、
わしがあつたは男ひとりにおかみさんが七^{しちにん}人、
そのどのおかみさんもふくろを七つ、
そのどのふくろにもねこめが七つ、
そのどのねこにもこねこが七つ。
セント・イブへとおまいりするのが、
さてさて、何^{なんにんなん}人何びき何ぶくろ。

のむもの

世界が一つのパイなら、

海がすっかりインキなら、

木がまたチイズとパンならば、

おれたちののむものそりや、なんだ。

それこそ甲羅^{こうら}経たじいめでも

頭をかかえてちよいとまいろ。

ちびねこ、さんねこ

「ちびねこ、さんねこ、かわいいの子、
どこへおまえは行ってたの」

「あたいは行ってたの、ロンドンに、
おめみえしたのよ、女王さまに」

「ちびねこ、さんねこ、かわいいの子、
そこでおまえはなにしたの」

「そうそ、玉座のおいすもと、
ねずみをちよろまかつかまえた」

雨もよう

いぬとねことがお友達にあいに、

ちよいと、街まちからつれだつてまいる。

ねこがもうします。

「お天気はどうでしょね」

いぬがもうします。

「さようさ、おくさんえ、雨がふりそでござんすが、

御心配はいりません、てまえがこうもり傘かさもつてますでな。

そのときやごいっしよに、相合傘あいがさとはいかがでしょ」

ポウリイ、やかんを

ポウリイ、やかんをかけときな。

ポウリイ、やかんをかけときな。

ポウリイ、やかんをかけときな。

みんながのむんだ、お茶だよ。

スケイ、そいつをおはずしな。

スケイ、そいつをおはずしな。

スケイ、そいつをおはずしな。

みんながもうもう行いつちやうぞ。

南^{パンプキン} 瓜^{ズキ}

ペエタアさん、ペエタアさん、南^{パンプキン} 瓜^{ズキ}、

女房もつてもお守り^もができず、

南^{パンプキン} 瓜^{ズキ}の殻^{から}にと、どしこんで、

やっところ、ほくほくお守りした。

ぼう、うおう、うおう

ぼう、うおう、うおう、

おまえさんどこのいぬ、

わたしやティンカアさんのいぬですよ、

ぼう、うおう、うおう。

さんびやくや
三百屋

トムミイ・ツロツトさん、
さんびやくや
三百屋、

ベッドを売って、

わらの上へごろりよ。

そのわら売って、

草の上へごろりよ。

そしておかみさんに姿見鏡すがたみ一つこ買うてくりよ。

お釘くぎがへれば

お釘くぎがへれば、

蹄かなぐつ鉄かなぐつうせる。

蹄かなぐつ鉄かなぐつへれば、

おうまがうせる。

おうまがへれば、

のりてがうせる。

のりてがへれば、

戦いくさがうせる。

戦いくさがないと、

王さまのお国やうせる。

おうまの蹄鉄かなぐつがへったせいだよ。

二十四人の仕立屋

二十四人の仕立屋が

ででむしころしに、えつさつさ。

めつたにしつぽにやふれまいぞ。

そりやこそでむしが角つのだした、

ちつちええカイロうしそつくりだ。

にげにげ、にげなきやいまにもころされる。

ででむし角だせ

ででむし、ででむし、角だせや、

お父^{とう}さんもお母^{かあ}さんもしんでしもうた。

おまえの御兄^{ごきょうだい}弟姉妹は裏^{うら}ん口^{くち}の庭で

パンをおくれエと乞^こうている。

お針みつけたら

お針みつけたらつまみあげておとりな。

その日いちんちいいことばかり。

お針みつけてそのまましときや

その日いちんちわるいことばかり。

風よ、ふけ、ふけ

風よ、ふけ、ふけ、

ひきうすまわせ、

粉屋粉ひき、

パンやさんがこねて、

朝はほやほやふかしたて。

気軽な粉屋

気軽な粉屋が

デイ河かわにござる。

朝から晩まで

はたらいちやうたう。

ふざけてばっかり、

一つことばかり、

おきまり文句で

一つことばかり。

『だれにかまうもんか、いやいや、わたしや、よ。』

だれがかまうかよ、このわしに。ホイソラ、ホイソラ』

いなかっぺえ

いなかっぺいのおたずねだ。

『いちごが何本海にある』

うまく返事をしてのきよか。

『何なんびき匹にしんが森にいる』

おかごのばあさん

おばあさんがひとりおかごにのって、
ふらふらあがる。

月よりたかく、九十倍くじゅうばいもたかく、

どこへゆくのか、きこうにもきけず、

お手々にほうきをもって、あれあれあがる。

『おばあさん、おばあさん、おばあさん、

どこへゆくのか、どこへ、

そんなにたかくあアがって』

『まるてんじょう円天井のすすはきじや』

『はアやくかえってちようだいよう』

『あい、あい。ちよつくら、いますぐだ』

すつとんきような南京^{なんきん}さん

すつとんきような南^{なん}京^{きん}さんがお三^{さん}かたごぎつた。

それは皆さまとくより御承知だ。

きやつきやさわいで獵^{かり}にとでかけた。

しかも、めつそうもない、安息日^{あんそくび}にでござる。

永^{なが}のいちんち、獵^{かり}をしてまわり、

これというもの根つから葉つからみつからない。

一つみつけたは帆^ほかけた船よ。

それが追風おつてにしゅっしゅっとはしつた。

「あれは船だ」と一番さきのがいいでした。

「なんの、うそだ」と二番目のがうちけした。

「あれは家うちさ」と三番目のがいいのけた。――

「こわれ煙えんとつ突とつまでとつついてるじゃないかいな」

永ながのひとばん一かり 晩ばん猫ねこをしてまわり、

これというもの根っから葉っからみつからない。

一つみつけたはおすべり屋のお月さんだ、

それがふかれてつるつるとすべつた。

「あれはお月さんだ」と一番さきのがいいだした。

「なんの、うそだ」と二番目のがうちけした。

「あれはチイズさ」と三番目のがいいのけた。――

「二つわりにしたその半分きりさね」

またもいちんち^{かり}猫をしてまわり、

これというもの根っから葉っからみつからない。

一つみつけたは木いちごやぶのはりねずみ。

それをうしろにとおりすぎてしまう。

「あれははりねずみだ」と一番さきのがいいでした。

「なんの、うそだ」と二番目のがうちけした。

「あれは針さしさ」と三番目のがいいのけた。――

「よくもめちやくちやにお針をさしたもんだすな」

またも夜つびで、猟をしてまわり、

これというものの根つから葉つからみつからない。

一つみつけたはかぶら畑ぼたけの野うさぎだ。

それをみすててまたいつてしまう。

「あれは野うさぎだ」と一番さきのがいいでした。

「なんの、うそだ」と二番目のがうちけした。

「あれはこうしき」と三番目のがいいのけた。――

「あいつ、めうしにおきざりされたやつだんね」

またもいちんち、猫をしてまわり、

これというものの根つから葉つからみつからない。

みたは洞木うろぎの分別ふんべつ顔がおのふくろうよ。

それをうしろにまたいつてしまった。

「あれはふくろうだ」と一番さきのがいいだした。

「なんの、うそだ」と二番目のがうちけした。

「あれはじじいさ」と三番目のがいのけた。――

「それぞれごましお頭の髪の毛をみさいな」

鼻まがり

あいつあよつぽどみようだ、まつすぐにやゆかぬ。

そのわけしってるか、

鼻のむいたほうへむいてゆく。

どおりで、やつこさん、鼻まがり。

あの丘のふもとに

あの丘のふもとに

おばあさんがござった。

もしも去いなんたら

まだ住んでござろ。

あたいのめうし

あたいのめうしはちっぽけだ。

ひよろひよろ、ひよっこり、ひよっこりよ。

あたいのめうしは、ちっぽけだ、

めうしのふくらはぎはちっぽけだ。

ひよろひよろ、ひよっこり、ひよっこりよ。

あたいの歌はまだなかば。

あたいのめうしはちっぽけだ。

ひよろひよろ、ひよっこり、ひよっこりよ。

あたいのめうしはちっぽけだ。

やつとこうし小屋へおいこんだ。

ひよろひよろ、ひよっこり、ひよっこりよ。

そここでお歌もちゃんちゃんだ。

ゆりかごうた

ねんねや、ねんねや、おねんねや、

ぼうやがお父さんとうひつじ守りも。

お母さんかあはねんねのねむりの木、

ねんねやねんねとゆすりましょう、

ゆすればお夢がふりかかる。

ねんねや、ねんねや、おねんねや。

こびつちよの子供は

こびつちよの男の子はなんでつくる、なんでつくる。

こびつちよの男の子はなんでつくる。

かわずとででむしとこいぬのしつぽでつくられた。

それぞれ、こびつちよの男の子がつくられた。

かわいい女の子はなんでつくる、なんでつくる。

かわいい女の子はなんでつくる。

おさとうに薬味やくみに、あまいものずくめ。

それそれ、
かわいい女の子が
つくられた。

ねんねこうた

ねんねこ、ねんねこ、ねんねこや。

なアいてお母^かさんをなかすなや、

なかれりやわたしもつろござる。

ねんねこ、ねんねこ、ねんねこや。

はしっこいジャック

はしっこいジャック、

すばやいジャック、

ろうそくたて一つ、

ジャックが

とびこした。

ででむし、でむし

ででむし、でむし。

ぬすつとがくるぞ、おめんちの壁を
ぶっこわしにくるぞ。

ででむし、でむし。

その角だせよ。

ぬすつとがくるぞ、小麦をとり、

ぬすつとがくるぞ、夜あけの四時に。

いちれつ
一列こぞつて

いちれつ
一列こぞつて、

弓をひき、

おはとを射ったら、

からすめをころした。

で
で
むし

で
で
むし、
で
で
むし、
角
だ
せ
や。
パ
ン
と
お
麦
を、
そ
れ、
あ
げ
よ。

おりこうさん

とてもがむしやら、おりこうさん、
いきなりばんばらやぶ敷へとびこむと、
めだま眼玉がポンポンひんむけた。

おやおやつ、眼玉がつん出たら、
それこそこんどはくそ力、
横つちよの小藪へとびこんだ。
そしたら眼玉がすっこんだ。

おしやべり

やまがらのおしやべり、

お舌^{した}がさけよぞ。

町じゅうのいぬが

ちんちんにかんじやうぞ。

ハートのクイン

ハートのクインが饅頭タアートをつくられた。

みんなできたよ、夏の日いっぱいかアかった。

ハートの兵士ネイブが饅頭タアートをぬウすんだ。

こいつしめたとそつくりもつてにげてつた。

ハートのキングが饅頭タアートとおつしやつた。

そりやこそたいへん、兵士ネイブを御折檻ごせつかんなすつた。

ハアトの兵士ネイブが饅頭タアトをかえした。

まつぴらへいこう閉口して、もうもういたしません。

コケコッコおどり

コケコッコ、コケコッコ、コケコッコ。

おくさんがおくつをなあくした。

だんなさんがヴァイオリンの弓をなくし、
どうしていいのかおおよわり。

コケコッコ、コケコッコ、コケコッコ。

おやおや、おくさんどうなさる。

だんなさんがヴァイオリンの弓をさがす、

それまで、はだしでおおどりか。

コケコツコ、コケコツコ、コケコツコ。

おくさんがおくつをなあくした。

だんなさんがヴァイオリンの弓をみつけ、
それきた、コケコツコ、コケコツコ。

コケコツコ、コケコツコ、コケコツコ。

さあさあ、おくさん、それおどろ。

だんなさんがヴァイオリンの弓をこすり、
それそれおどれと、コケコツコ。

コケコツコ、コケコツコ、コケコツコ。

おくさんがおくつをなアくした。

ねてもねられずおおよわり、

頭の髪かみげ毛もめつちやくちや。

でんでんむしむし

でんでんむしむし、

角ひけよ。

ひかなきや山^{さんしよ}椒^{つぶ}の粒^{つぶ}ふりかける。

おばあさんとむすこ

ひとりのおばあさんと三人のむすこ、

ジェリイ、ジェムス、それにまたジョンよ。

ジェリイは首くくった。ジェムスはおぼれた。

ジョンはどこかへいなくなってしまった。

だあれもみつけたものがない。

三人のむすこがみんなしんでしまった。

ジェリイ、ジェムス、それにまたジョンよ。

てんとうむし

てんとうむし、てんとうむし、

はよう家^{うち}へかえれ、

おまえの家^{うち}や火事だ。

みんな子供がやけしんだ。

むすめのアンヌがたったひとり、

プツジングのなべの下に

つんぐりむんぐりもぐった。

あつたかいパン

あつたかいパン、

あつたかい、あつたかい、あつたかい、あつたかいパン。

一ペンニイで一つ、二ペンニイで二つ、

あつたかいパン。

おまえにむすめがないならば、

おまえのむすこにおあげなえ。

一ペンニイで一つ、二ペンニイで二つ、

あつたかいパン。

ゴツトハムの三りこう

さてもゴツトハムの三りこう、

おわんにのつかって海へでた。

もそつとおわんがしつかりさえしてりや、

ここらでこの歌もきれやしまい。

気ちがい家族

気ちがいの御亭主に、

気ちがいのおかみさん、

気ちがい小路こうじに住んで、

三つ児をうんで、

どの児もどの児も気がちごた。

お父さんが気ちがい、

お母さんが気ちがい、

みんな子供が気ちがい。

気がいうまにのって、

いっしょくたに、みんなのって、

まっくらさんぼう三宝さんぼうに、かけてった。

ちつちやなだんなさま

あたいのちつちやなだんなさま、

おやゆび
拇指ゆびよりかもまだちさい。

こまめのおつぼにちよいといれて、
どんがどんがはやしてせりあげよ。

ちつちやなおうまもこ買うてあぎよ。

そして、とつとかけさして、

たづなとらせて、くらおいて、

さあさ、ねりだそ、町の外。

かわいいいくつした結いわくなら

それにはちつちやなどめ金具かなぐ、

ちつちやなお鼻をふきやるには

かわいいちつちやなハンカチフ。

一つのたるに

一つのたるに、三人はいり、

どんどこ、どんどこ、すつどんどん。

あいつらだれだ。

肉屋にパン屋、

ろうそく屋の亭主。

つっころがしてしまえ。

しよあのねえやつらだ。

ジャツクとジル

ねんねの小鳥が岡おかに二羽、

一羽がジャツクで、ほかのがジルよ。

とんでつたジャツクが、

とんでつたジルが、

またきたジャツクが、

またきたジルが。

トムトムぼうず

トム、トム、トムぼうず、

笛ふきのむすこ、

ぶたをぬすんでにげたはよいが、

ぶたはたべられ、トムあぶつたたかれ、
ないておんおん街をかけた。

いぬはぼうおう

いぬはぼうおう、

ねこはみゆうみゆう、

おぶたはぐるんぐるん、

ねずみはすけえく。

ふくろはつうふう、

からすはかうかう、

めがもはくわつくくわつく、

う
し
も
う
も
う。
。

ちいさなおじよつちゃん

額のまひたいんなかに、きらきらちぢらした

ちいさなまきげの、

ちいさなおじよつちゃん、

ごきげんいいときや、

それはそれはいい子で、

おわるいときにはこオわい子。ソレ、こオわい子。

やぶ医者

やぶ医者の方オスタアさんが、
グロオスタアへいって、
にわか雨にあつて、
水たまりに立ち往生して、
おへその上まで水びたり。
それから二度とはようゆかぬ。

きれいずきのおかみさん

お月さんのおとりもちでお嫁にござった。

きれいずきの、世帯しよたいもちの、しまりやのおかみさんだ。

おひるにでもならなきやなんとしてもおきない。

ほんとにしまるなら、それこそたのむよ。

やつとこさとおきればおもいきってせかせか、

きれいずきの、世帯もちの、しまりやのおかみさんだ。

灰かきで麦こつ粉をやっさもっさもねます。

ほんとにしまるなら、それこそたのむよ。

ながぐつにどろどろどしこんだバタをよ、

きれいずきの、世帯もちの、しまりやおかみさんだ。

ひっかき棒のかわりにお足でべっちやべっちや。

ほんとにしまるなら、それこそたのむよ。

チイズは台所の物置のおたなに、

きれいずきの、世帯もちの、しまりやおかみさんだ。

ひとりでにころげるまでうつちやつちやつてかまわない。

ほんとにしまるなら、それこそたのむよ。

御婚礼

ぶうん、ぶうん、ぶうぶうぶ。

はえがくまんばちにお嫁いり、

いよいよ教会へいきやして、首尾よく御祝儀あいすんだ。

はえとくまんばちの御婚礼。

タツファイ

タツファイはウエルス人、タツファイはどろぼう。

わたしの家うちにやってきて、牛肉ひとくれ一塊ぬウすんだ。

タツファイの家うちへいったらば、タツファイはいなかった。

タツファイがやってきて、髓ずいこつ骨一本ぬウすんだ。

タツファイの家へいったらば、タツファイはいなかった。

タツファイがやってきて、こんどは麵棒めんぼうぬウすんだ。

タツファイの家へいったらば、タツファイはねていた。

そこで火棒ひかきとって、そいつの頭になげつけた。

ばばア牛

黒白まだらの御面相は、

チャアレエ・ワアレエの女郎牛めろうしだ。

その木戸あけねえか、おとおりじや。

チャアレエ・ワアレエのばばア牛。

とつびよくりん

とつびよくりんのとん吉が、
とつびよくりんのとん吉が、
おまんじゆうをいただいて、
そとがわだアけのオこした。

卵うりましようと

卵うりましようと、わしがゆく道で、

でおうた、でおうたよ、ねじれ足とでおうた。

足はねじれ足、爪つめまがり爪つめ、

こいつおもしろいとかかとをちよいとすくう、
そこで、すたとんと地べたに小鼻をぶつつけた。

かささぎが一羽よ

かささぎが一羽よ、なしの木にとオまった。

かささぎが一羽よ、なしの木にとオまった。

かささぎが一羽よ、なしの木にとオまった。

おおしんど、ああしんど、おおしんどよう。

うれしそに一度よ、ちちんがちんとはねた。

うれしそに二度よ、ちちんがちんとはねた。

うれしそに三度よ、ちちんがちんとはねた。

おおしんど、
おおしんど、
おおしんどよう。

これ、これ、こいきな

「これ、これ、こいきなおむすめご、
おまえはどちらへおいでです」

「お乳しぼりにまいます」

「これ、これ、こいきなおむすめご、
わたしもいつしよに行いてあぎよか」

「ええ、ええ、そんならうれしいわ」

「これ、これ、こいきなおむすめご、

おまえのお父さんはなになさる」

「わたしのお父さんはおひやくしようよ」

「これ、これ、こいきなおむすめご、

おまえさんに財おたから産ありましょね」

「いえ、いえ、御器量ごきりょうが財おたから産よ」

「これ、これ、こいきなおむすめご、

そんならお嫁さんにやちとこまる」

「いらぬおせわでござります」

市場^{いちば}へ、市場へ

市場^{いちば}へ、市場へ、乾^プ葡萄^{ラム}入^ムケイキかいに、
かえろよ、かえろよ、市場にやおくれた。

市場へ、市場へ、乾^プ葡萄^{ラム}入^ムパンかいに、
かえろよ、かえろよ、市場ははねた。

数学

掛け算はしちめんどう、

割り算は因業、

比例は人なかせ、

応用問題気がちがう。

眼め

青い眼めはきれい、

灰色の眼は陰気、

黒い眼は腹黒、

鳶とびいろ色眼玉はおばアけ。

五月のみつばち

五月のみつばちや、

ほしくさいちだ
乾草一駄よ。

六月のみつばちや、

銀のさじとおなじね価よ。

七月のみつばちや、

はえの一匹にも、つつかわぬ。

朝のかすみ

朝のかすみと夕焼け空は、

ひより
日和よいとの前しらせ。

くもる日ぐれと朝焼け空は、

よ
お寝るひつじをみなぬらす。

かつこ鳥

きれいな小鳥、かつこ鳥、
とびとびうたうかつこ鳥、
ないてしらするその声は、
つゆうそのないいいしらせ。

小鳥の卵ねすすするゆえ、
なく音ねすすしいかつこ鳥、
はやもなきます、かつこうと、

夏がもうじきまいます。

豆ごぞう

豆んちよの家の^{うち}、

豆んちよのごぞうっこ、

よその養魚池^{かいぼり}へおしかけて、

^{さかな}魚をびんぴとつりあげた。

ソロモン・グランデイ

ソロモン・グランデイは、

月曜日にうまれて、

火曜日に洗礼うけ、

水曜日に嫁とつたが、

木曜日には病気になり、

金曜日にずんと重^{おも}つて、

土曜日におつ死^ちぬちゆうと、

日曜日にはうめられた。

ソロモン・グランデイの御ご一いち代だい。
そこでおしまい、ちやアんちやん。

かえるの殿御とのご

お池にござるはかえるどの、
お池にござるはかえるどの、
はつかねずみは粉小屋こなごやに。

相手ほしやのかえるどの、
相手ほしやのかえるどの、
でんでんむしの背中にうちのつて。

はつかねずみのお宿^{やど}まで、

はつかねずみのお宿まで、

そこで戸たたたく、ものもうす。

「はつかねずみのお姫^{ひい}さま、わたしや其^そ様^{さま}にあいにきた、

はつかねずみのお姫^{ひい}さま、わたしや其^そ様^{さま}にあいにきた、

お気にめしたか、めすまいか」

「なんとお返事いたさりように、

なんとお返事いたさりように、

まして叔父^{おじ}様の^さるすのうち」

ねずみの叔父御おじごがもどられて、
ねずみの叔父御おじごがもどられて、
「だれかみえたぞ、るすのうち」

「いやな殿御とのごがござんした、
いやな殿御とのごがござんした、
叔父様おじさまのおるすにござんした」

そこでなきなき、かえるどの、
なきなき、小川をかえるどの、

めがものお上じょうろう 藤とであわしやる。

よいものみつけた、ござんなれ、ござんなれ、

めがものお上じょうろう 藤に、かえるどの

ぱくとのまれてきゆうきゆうきゆう。

さてもあわれな物語、

ここらあたりで、あなかしこ。

一切空

いっさいくう
一切空ちゅうおばあさんがどこかしらにござった。

豆つちよろのお家いえにおさまりかえってござった。

そこへだれだかぬうとでて、

かつと口あけ、すう、ぱくり。

お家うちもおばあさんも一切空。

ロンドン橋

ロンドン橋^{ばし}がおちた。

ロンドン橋がおちた。

なんでこんどかけるぞ。

なんでこんどかけるぞ。

銀と金とでかけてみる。

銀と金とでかけてみる。

銀も金もぬすまれた。

銀も金もぬすまれた。

鉄と鋼鉄とでかけてみる。

鉄と鋼鉄とでかけてみる。

鉄でも鋼鉄でもへしまがる。

鉄でも鋼鉄でもへしまがる。

材木と粘土とでかけてみる。

材木と粘土とでかけてみる。

材木、粘土はながされる。

材木、粘土はながされる。

そんなら石でかけ、そりや丈夫じよぶだ。

千年万年大丈夫だいじよぶだ。

世界じゅうの海が

世界じゅうの海が一つの海なら、

どんなに大きい海だろな。

世界じゅうの木という木が一つの木ならば、

どんなに大きな木であろな。

世界じゅうの斧おのが一つの斧なら、

どんなに大きな斧だろな。

世界じゅうの人たちがひとりの人なら、

どんなに大きな人だろな。

大きなその人がおおきな斧をとつて、

大きな木をきり、

大きなその海にどしんとたおしたら、

それこそ、どんなにどんなに大きい音だろな。

空はじめじめ

空はじめじめ、

雨もよい、

ちつちやなおじいさんにおうたら、

身ぐるみ革かわきて、

あごに無縁帽シヤッポつんだして、

「おさむう、おさむう、こんにちは」

空はじめじめ、

おわかれと、

よぼよぼなかまが手をにぎり、

身ぐるみ革きて、

あごに無縁帽シヤッポつんだして、

「さよなら、さよなら、またいつか」

アアサア王

アアサア王の御治世ごじせいじや、

アアサア王はよいかたで、

挽割麦ひきわりさんぎん三斤ぬウすんで、

袋ふくろなり形のプツジングをこさえよか。

いよいよ王さまのお手製で、

それには山もり乾ほしぶどう、

拇指おやゆび二つよりかまだふとい

脂あぶらにくにく肉にくをを二ふた塊きれどしこんだ。

王さまとおきさきとがまずめして、

つぎに大臣たちがおしょうばん、

そしてその夜のおあまりは、

翌朝よくあさおきさきが油あぶら揚げ。

がぶがぶ、むしやむしや

どうしたことだえ、このおばば、
のんだりくったり、そればかり、

ほかにはなんにもようせぬで、

くうのとのむのが商売かい、

むしやむしや、がぶがぶ、ぐずりばば、

ぶつぶつぶつぶつまだやめぬ。

天竺てんじくねずみは

天竺てんじくねずみは追っかけごっこがだいすきだ。

ツラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ。

捕とらよとおもうならまず駈かけた、

それ手をはなした、

どつちがはやいか。

ツラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ。

ジャック・スプラットと

ジャック・スプラットとそのかか鼻かさ。

じいさはたべてもやせこけだ、

ばばさはふとつても意いじぎ地汚ただ。

ふたりの間あいな中かを、ちよとごらん、

お皿はすべすべなめてある。

せぼね
背骨まがり

せぼね
背骨まがりのあまのじやく、

背骨まがりの旅をして、

背骨まがりの石段で、

背骨まがりの六ペンスをひろい、

背骨まがりのねこを買い、

背骨まがりのねずみをとらせ、

背骨まがりの豆いえんちよの家に、

背骨まげまげおさまった。

（注）あちらでは、つむじまがりのことを背骨まがりと申します。

おらがお父^{とと}は

おらがお父^{とと}はおつ死^ちんだ。

何^{あん}といつてええだが、こちやしらぬ。

うまを六匹くんさんし。サテ、

犁^{すき}でもつてすけちゆうだ、おえちゆうだよ。

うまを六匹売つとばし、

めうしを一匹、こちや買つてな、

一^{ひと}身^{しん}上^{しょう} あんべとごきげんだ。サテ、

何^{あん}としてええだが、まだしらぬ。

そこでめうしを売つとばし、

ふくらはぎを一本、こちや買つてな、

一身上あんべとごきげんだ。サテ、

極上肉を半ぺら、またなくす。

そこでふくらはぎを売つとばし、

めねこを一匹、こちや買つてな、

あまつちよのねこめも愛^ういやつじや。サテ、

煙^{けむ}突^{だし}のすみっこに、ちよんとすわる。

またまたねこめを売つとばし、

はつかねずみを、こちや買つてな、

尻尾しっぽつまんで火になげた。サテ、

おらのお家うちがぼうともえた。

ねごと王さま

さてもこのたび、ねごとが王さまに御^ご拝^{はい}謁^{えつ}、
ごぶじにおさまりや、しあわせだ。

がアがア、がちよう

がア、がア、がちよう、

うろついてどこいこ、

階かいじょう上を、下したを、

おくさまのへやで、

じじいにであつた、

そのじじいどうした、

不信心ぶしんじんないやなやつ、

そこで、そいつの左の足をすくつて、

す
つ
て
ん
こ
ろ
り
と
あ
が
り
段
か
ら
こ
ろ
が
し
た
。

火の中に

火の中に^{タアル}石脂、

^{かし}櫛の中にはすつからかん。

^{どろなアか}泥の中にうなぎ、

粘土の中にはすつからかん。

やぎが^{つた}蔦くう。

めうまが麦くう。

火ばしの一対

足なが、せむし、
小^こ頭^{あたま}、眼^めなし、
それなアに。

お月さま光る

おじよっちゃん、おぼっちゃん、外へでてあすぼ、
お月さま光る、昼のようにあかる。

口笛ふいてきなよ、よばわってきなよ。

上々きげんででてきなよ。でなけりやおことわり。

夕飯ゆうめしうっちゃって、石盤せきばんうっちゃって、

街へでてきなよ、あそびなかまがまつているに。
ときの声あげて、とんだりはねたりしておいで、

お月さまの光にぐるぐるまわっておどりましょう。

あがり段にのぼり、石垣とびおりて、
ころがしやお銭ぜせがなにもかもくれる。

牛乳が買える、はちのみつが買える、
はんとき半時はんときたたずにおまんじゅうが買える。

おもちやのうま

はいしどうどう、

おうまにのって、

チャアリング・クロスへいてみよか。

きれいなレデイが、

白いうまにのって、

お手々に指輪、

おくつに鈴つけ、

ちんからちんからとおる、

それみにいこか。

ちんからちんから、りんりん。

なけなけ

なけなけ、赤ちゃん、

眼玉にお指をつっこみな。

そしてお母^かさんへ行ったらば、

あれはぼうやじゃないとおいい。

北風ふけば

北風ふけば、

雪がふろ、

かわいそなこまどりはどうするぞ。

かわいそなものね。

お倉なアかの中の刈かり麦むぎに、

もウぐりこウぐり、ぬくもろぞ、

お羽根うウらの裏うらに首まげて。

かわいそなものね。

めくら鬼

めくら鬼、めくら鬼、

めん眼めがみえないごぞんじか、

くるくる三遍まアわって、

わたしをつかめてごらんなね、

こオろぶなころぶな、

だれでもいいからとつつかめ。

わたしはこつちだよ、とつつかまえたとおおもいか。

笑しょうし止しょうし、めくら鬼。

お山の大將

みろやい、ひととび、

おりやここだ、

だアレもこれまい、

おれひとり。

上へいった

上へいった、いった、いった。
下へいった、いった、いった。
前へいった、うしろへいった。
ぐるぐるぐるとまアわった。

みんなして森へ

(五つの指のさきをつついてうたう)

- 一 このぶた申す。みんなして森へ。
- 二 このぶた申す。なにしに森へ。
- 三 このぶた申す。お母さんにあいに。
- 四 このぶた申す。そしてそしてどうするの。
- 五 このぶた申す。かじりついてキツスしよ、キツスしよ。

このぶた、ちびすけ

(おなじく)

- 一 このぶた、ちびすけ、市場^{いちば}へまいった。
 - 二 このぶた、ちびすけ、お留守番でござる。
 - 三 このぶた、ちびすけ、牛肉あぶった。
 - 四 このぶた、ちびすけ、なアんにももたなんだ。
 - 五 このぶた、ちびすけ、ういういうい。
- いっしょにお家^{うち}へ、よいところしよ。

おくつをはかしよ

(五つの足をつつきながらうたう)

一 おくつをはかしよ、こうまにはかしよ。

二 めうまにはかしよ。

三 ふくろを背せなにのしよ。

四 しよったか、みよよ。

五 しよったら、麦よ。

しよわなきや、脳みそぶつつウぶしよ。

ながい尾のぶたに

ながい尾のぶたに、

みじかい尾のぶたに、

尾のないぶたに、

めぶたにおぶた、

まきじつぽのこぶた。

あアがった、あがった

甲 あアがった、あがった、はしご段を二つ。

乙 ちようど、わたしのとおりよ。

甲 あアがった、あがった、はしご段を四つ。

乙 ちようど、わたしのとおりよ。

甲 おへやへはいった。

乙 ちようど、わたしのとおりよ。

甲 お窓の外そとをなアがめた。

乙 甲 乙
ちようど、わたしのとおりよ。
ちようど、わたしのとおりよ。
ちようど、わたしのとおりよ。

ワン、ツウ、スリイ、

フォア、ファイブ

ワン、ツウ、スリイ、フォア、ファイブ、
魚を^{さかな}ピンピンつかまえた。

なぜそれにかした。

指をかんだ、手をかんだ。

どっちの指かアんまれた。

この右の小指よ。

顔あそび

この殿さま、御着座。おちやくざ（額）

ふたりの御家来。ごけらい（両方の眼）

おんどり。（右のほお）

めんどり。（左のほお）

いそいで御入来。ごじゆらい（口）

チンチヨツパア、チンチヨツパア。

チンチヨツパア、チン。（あごをなでる）

このベル

このベルならした。

(髪の毛を一つまみ、ひっぱる)

このドアたたいた。

(額をたたく)

この錠じょうはずした。

(鼻をつまみあげる)

さあ、さあ、はいりましよ。

(口をあいて指を中へつつこむ)

足

二本足がすわった、三本足の上に。

一本足をしやぶった。

四本足しほんあしがやってきて、

一本足さらってにげてった。

二本足がとびあがり、

三本足をひつつかみ、

四本足めがけてなげつけた。

そこで一本足をとるかアえした。

(注) 一本足は牛の骨、二本足は人間、三本足は腰かけ、四本足は犬。

一番目のお床

- 一番さきにねた子に金の財布さいふ、
- 二番目にねた子に金の雉子きじ、
- 三番目にねた子に金の小鳥。

おしまい

よぼよぼがらすが

一羽地にとまった。

そこでお謡うたもちゃんちゃんだ。

卷末に

「マザア・グウス」の童謡は市井しせいの童謡である。純粹な芸術家の手になったのではなからう。しかし、それだからといって一概に平俗野卑だというわけにはゆかない。日本の在来の童謡、すなわち私たちが子供のときにいつも手拍子をたたいてはうたったかの童謡はやはり民衆それ自身のものであった。だれのなにがしという有名な詩人の手になったのではない。自然にわきあがってきた民族としての子供の声であった。その中にはむろん平俗なものもあった、いかがわしい猥雑わいざつなおとなのものもあった。しかしほん

とうの子供の声はその中であつた。すぐれて光つていた。これを
思わなくてはならない。本来の民謡なるものは、野山の木萱きかやのそ
よぎそのものからおのずとわきでたものである。はじめはだれが
歌つたとなく歌いだされて、つぎつぎに歌い伝えられて、歌いな
おされて、ほんとうに洗練されたいいものばかりが永く残ること
になつたのである。で、その長い民族精神の伝統ということにつ
いて充分に尊重しなければならぬ。この意味で日本在来の童謡
は日本の童謡の本源であり本流である。「マザア・グウス」もお
なじく英国童謡の本源とみなしていいであろう。こうした民族の
伝統ということを考えないで、ただ優秀な詩人の手になるもの
のみが真の高貴な歌謡だと思ふのはまちがいであろう。私はそうし

た妙な詩人氣取りはきらいである。

ほんとうを言うと、民謡とか童謡とかいうものは、たとえそれがある種の詩人の作だったにせよ、その歌謡が一般民衆のものとなつた以上、その作者の名は忘れられて、その歌謡だけがすべての民衆のものとなる。そうして残れば残るだけ、その歌謡は民謡として成功したものだというる。すなわち作者の名が忘れられれば忘れられるだけ、ほんとうの民謡として光あるものであるのだ。

今日「マザア・グウス」の童謡として伝えられているものうち、グウス夫人の作がむろんすべてであるとは思えぬ。いろいろ作者未詳のもの、子供そのものの声が混入しているにちがいない。

グウス夫人の名すらも英国その他の英語本位の国々では忘れられて、子供たちはいわゆるお母さんがちよりの謡うただと思つてゐる。読まれるということよりも歌いはやされている。すなわちイギリス民族そのものの童謡となつてゐる。この民衆そのものの歌謡を決して侮つてはならない。

ことにその快活、その機智、その鋭い諷刺ふうし、無邪、諧かいぎやく諺、豊潤な想像、それらのたぐいまれな種々相にはさすがに異常な特殊の光が満ちている。むろん、これらの中には純粹な芸術上の立場から見ると、多少の玉石混こんこう淆こうは免れぬ。しかしこれは民謡としての紹介にはしかたのないものである。だから芸術品として見てもずいぶんいいと思うものがある代わり、ずっと品位の落ちた

のも少々はある。それにしてもどうにも棄てるには惜しいなら
かの鋭さが蔵されている。で、私は拾った。ただ無批判に手当た
り次第に訳したのではない。これでないと「マザア・グウス」の
大体がはつきりしないからである。子供というものはそうビクビ
クして教育しなくともよい。私は子供の叡智えいちを信じている。

私はまたこれらの Nursery Rhymes を訳しながら、洋の東西を
問わず子供の感情ないし感覺生活ということについてはほとんど
おなじだということに驚かされた。この中の「てんとうむし」
のごときは全然日本の「からすからす」の童謡とそっくりではな
いか。幾つかの「ででむし」の謡うたのごとき、またほとんど同じで
はないか。

ただ、彼においてはきわめて都会的な軽快味とその縦横無碍むげの機智とにずばぬけている代わり、日本の子守唄のようなほんとしみじみとしたあの人情味には欠けていはしまいかと思われる。で、私は日本在来の民謡やそうした子守唄のありがたさをつくづくと顧みた。ただここでは委細の比較は読者にお任せする。

私がこの集に訳出したのは「マザア・グウス」の童謡を主として、なお英米児童の間に行なわれている遊戯唄ねんねこ唄その他のものを取り混ぜた。

翻訳するに当たっては四、五種の童謡集、楽譜等をかれこれ参照した。同一の童謡でもいろいろ歌いくずされたり、抜かしたり

してある。はなはだしいのは肝腎かんじんな個所で全然反対の意に変わっているのもある。そういうのは最もいいと信じたものから選択した。この集の序詩のごときはどの本をのぞいてもところどころ抜けていた。で、みんなから綜合そうごうしてあのとおりにまとめてしまった。しかしどの聯れんもどの行も私の自儘じまに作り足したのではない、そのままそろえて完全な一つのものとしたのである。

元来、翻訳ということにはむずかしい。とりわけ韻文の翻訳は難行である。語学者でもなく、学力も乏しい私が、この難事に身を入れることはかなりはばかられることではあるが、ただ幸いに私は詩を作っている、民謡としての日本のことばをどうにか風味してきた。で、詩とか民謡とかについては、その真精神、そのリズム

ムの動き方等にはまずまず相当の理解を持つているつもりである。で、その力を頼りにともかくやりはじめてみたのであった。

第一の困難は、これらの童謡はむろん手拍子足拍子で歌うべきものであるので、訳もまたきわめて民謡風の動律で、全然歌うようにしなければならぬ。で、原謡のリズムの動き方についてはそのとおりそのままの推移法を必要とする。これを違つた国のことばで移そうとするのはかなり無理なことである。そしてまた歌えるようにするのはなおさらである。

で、ある少数の例外を除いて、私はなるべく一行ずつほとんど逐次に訳していった。大体において逐次訳といつていい。そのおかげで私は創作以上の苦しみをなめた。

もつとも、一昨年あたり、はじめてこのことに着手した当座はまだ不馴れで、充分手に入らなかったゆえに、謡いものとするために多少の手加減をしなければ思うように訳せなかった。それが次第に厳格な逐次訳でどうにか納めていけるようになった。で、この中には少数の手加減を入れた例外がある。

それから、*Rain, rain go to Spain* というような音韻上の引っかけことばのものは訳しようとするのがそもそも無理であるから訳しなかった。「雨、雨、スペインへ」では原謡のおもしろみがないからである。日本でなら「雨、雨、安房^{あわ}へ」というふうにあの韻で掛けてゆくべきものである。

Baa, Baa, Black Sheep とどうしようなのも困った。すべてBでい

っているのであるが、日本の黒羊のくにBは掛からない。かとい
つて、「くうくう黒羊」でも羊のなき声は出ない。「なけなけ、
黒羊」では意味だけのものになる。意味だけのものでは、ほん
うの訳にはならないのだ。しかたがなければその言語のまま生き
させるほかに道がない。

「やぶ医者の方オスタアさんが、グロオスタアへいって」とい
ふうのものはこれもことばの上の引っかけであるが、固有の名詞
でそのままやれるから、そのとおりにしておいた。「お医者さま
の西庵さいあんさんが埼玉さいたまへいって」というふうのしやれだ。これは
両方が固有名詞でいってるのでそのままでもいいが、雨とスペイン
のごとく、一つが普通名詞である場合はまったく困ってしまう。

で、あるものは「とつびよくりんのチャアレエが」と訳しては原謡の妙味が出ない場合に「とつびよくりんのとん吉が」というふうにとで掛けたのもある。これはとん吉そのものが人名というより、「とつびよくりん」そのものが通称化されているからさして障りさわにはならないし、チャアレエという人名は原謡にはただ音韻上のしやれに使用したままで、それ以上のものでないから本質的の引っかけの妙味を主として訳したのである。しかしこうした例はこれくらいである。

それからまた、

月の中の人が

ころがっておちて、

北へゆく道で

南へいつて

凝こごえたえんどうじる豌豆汁で

お舌をやいてこオがした。

の原語では「ノルウイッチへいく道をきいて、南へいつて」であるが、ノルウイッチはロンドンの北に当たるので、本質の精神は北へが南と対照して、ノルウイッチを知らない日本の子供にはつきりわかるし、このほうがずっと簡潔でいいからである。こんな場合の地名は除けた。しかし、この例もほかにはめつたにない。たいがい生かすべき固有名詞は生かした。

それからまた、日本語になおす場合に、語法の相違から、動詞の過去を現在格にしたり、そのまま直訳するよりも、かえってピタと本質的にその意に合う日本語がある場合は、その無意味な直訳は避けた。その真精神にそむくばかりでなく、日本語としても生きないからである。

それから、正直に「うまく返事をしてのけた」と訳したでは、かえってその本当の面目が出ない場合は「うまく返事をしてのきよか」というふうにしたのもある。

それからまた、「二十四人の仕立屋がでむしころしにいきました」を「二十四人の仕立屋がでむしころしにえっさつさ」とやったのもある。意は同じでも、えっさつさのほうが一列に、活

動人形そのままになって、足がさくさくとおなじに動くからである。

それからみだりがましくてちよつと困るのは多少気品をよくするため手加減したのがある。

で、こういうのは例外であるけれども、それだからといって充分意識してやっているのであるから、詩法を知らぬ語学者から頭ごなしに誤訳呼ばわりをされたくない。

ただ、学力の不足のためか、うっかりしたためにとんでもないまちがいをしたことがあるかもしれない。そうした条々がもしあればどうか御教示にあずかりたくお願いする。

私はそれらの内容と動律の本質とをわが日本の民謡語であたう

限り生かしきろうとつとめた。生かしえたなればありがたい。創作するとほとんど同様の誠意と熱心とをこれに傾けたのもこのゆえである。で、ある意味においては半ば私の創作ともいえよう。

以上

青空文庫情報

底本：「まぎあ・ぐうす」角川文庫、角川書店

1976（昭和51）年5月30日初版発行

1995（平成7）年1月30日24版発行

底本の親本：アルス版全集

1930（昭和5）年

※「*」は注釈記号です。底本では、直前の文字の右横に、ルビのように付いています。

入力：藤本篤子

校正：八巻美恵

1998年1月21日公開

2010年11月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

まざあ・ぐうす

北原白秋訳

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>